



ペシャワール会現地代表
PMS(平和医療団・日本)総院長
なかむら てつ
中村 哲先生
1962年 西南学院中学校卒業



人生の道しるべになった3年間でした。

私の兄が通っていたこともあり、自然と西南学院中学校に入りました。今から50年以上前になりますが、当時の校舎は海が広く、松林に囲まれた、素朴な環境の中にありました。クラスは3年間同じで、同級生同士の結びつきが強かったのを覚えています。入学当初は聖書の分厚さに驚きましたが、1日に読む章を決めて読み進めていました。チャペルでの礼拝についても、最初は少し戸惑いましたが、徐々に馴染んできました。また、アメリカ人教師の姿を通じ、国や人種などで偏見を持ってはいけないということを学びました。今考えると、3年間にわたるキリスト教教育から、自分自身の道徳観や倫理観が自然と養われたように思います。

NGOの医師としてパキスタンに赴任してから30年を越える歳月が流れました。ここまで情熱を持ち続けていたられたのは、私には“困っている人を放っておくことができない”という

思いが強くあるからです。この考えは、3年間の中学時代にはほぼ毎日チャペルで聞いていたことと同じです。いつからのかはっきりと意識はしていませんが、私の心の中にはキリスト教の精神がしっかりと根付いています。

西南学院は来年(2016年)、創立100周年を迎えます。今こそ建学の精神を大切にして欲しいと思います。西南学院が西南学院たる理由、それは即ちキリスト教教育の学校であるということです。西南学院が何を伝えるために生まれた学校であるのかを、この記念すべき創立100周年を機に、しっかりと胸に刻んでおくことが必要ではないでしょうか。

混沌としたこの時代、「平和であることの意義」が大きなテーマになっています。西南学院には、平和の意義を聖書の言葉で世の中に伝えることができる力を持っていると信じています。

2015年10月30日発行『赤煉瓦通信』(創刊号)

追悼

なかむら てつ **中村 哲**先生

2019年12月4日、遠いアフガニスタンの地において、人々と共に歩んで来られた中村哲先生の突然の訃報に接しました。多くの方が先生の死に心を痛め、深い悲しみに包まれています。このページでは、中村哲先生への追悼の意を込め、2015年10月の本誌創刊特集「創刊に寄せて—わが西南学院」に掲載した先生のメッセージを改めて掲載いたします。メッセージには先生が西南学院で学んだ3年間が凝縮されており、今、西南学院で学ぶ私たちが何をすべきか、気付きを与えてくれます。中村哲先生がチャペルで学んだ日々、先生の心の中に根付いたキリスト教の精神に思いを寄せ、平和の意義について考えてみませんか。



紛争の地、アフガニスタンにおいて、1,600本にも及ぶ井戸や27kmの用水路の建設に尽力。大干ばつだった土地に「武器よりも命の水を」の思いから緑が蘇った

—Profile—

1946年生まれ。九州大学医学部卒業後、国内の病院勤務を経て、1984年NGO医師としてパキスタン北西部のペシャワールに赴任。以来、パキスタンとアフガニスタンで医療活動と水源確保事業を続ける。2003年にアジアのノーベル賞とも呼ばれるラモン・マグサイ賞の他、数々の賞を受賞。また、2018年にはアフガニスタンからアフガニスタン国家勲章を受章した。「ペシャワール会」は中村先生の活動を支援する目的で結成された国際NGO団体。



西南学院が創立100周年を迎えた2016年には、5月14日に行われた記念式典において記念講演の講師としてお迎えした

「西南学院 中村哲先生 追悼の集い」を開催しました

2月24日、大学チャペルにて、西南学院中学校に学び「ペシャワール会」現地代表としてアフガニスタンで人道支援に取り組んでこられた中村哲先生を追悼する「西南学院 中村哲先生 追悼の集い」(主催:学校法人西南学院、西南学院中学校同窓会)を開催し、約350人が参加しました。

中根広次西南学院中学校・高等学校校長(当時)の司式のもと行われた追悼の集いでは、中村先生の同級生やゆかりのある人たちが、中村先生への追悼の言葉を述べました。和佐野健吾さん(西南学院中学校・高等学校、西南学院小学校 元校長)は「哲ちゃんはみんなの誇りであり、みんなの英雄だと思う」と述べ、西南学院高等学校の元生徒会長・岳本陽菜さん(当時3年生)は「平和をつくり出すといういう先生の遺志を私なりに受け止め、これから的生活や仕事の中で行動に移していくたい」と決意を述べました。

追悼の集いの最後には献花が行われ、参加者全員で中村先生をしのび、祈りをささげました。



追悼の言葉を述べる岳本陽菜さん

